

学校 家庭 地域 で考える 教師の働き方改革

小・中学校の教員不足が深刻化している。文部科学省が令和4年1月に公表した『「教師不足」に関する実態調査』によると、令和3年度の始業日時点での公立の小・中学校教師の不足人数は2086人で不足率は0・35%だった。その背景について、経済学部経営学科の辻和洋助教は「平成25年ごろから教員採用試験の受験者数が年々減っており、令和3年度の公立小学校教員採用倍率が過去最低の2・6倍になるなど、教員を目指す若

者が減少していることがある」と話す。

辻助教は、立教大学経営学部の中原淳教授らと共同で、『データから考える教師の働き方入門』（毎日新聞出版、平成31年）を出版した。この本は、横浜市との共同研究で平成29年に実施した「教員の『働き方』や『意識』に関する質問紙調査」のデータなどをもとに、教員の働き方の実態と、その解決策を考察した。

その中で浮き彫りにした教員の働き方について、辻助教は「学校の授業だけでなく、通学路の見回りや地域行事のあいさつ回りなど福祉業務と呼ばれる仕事まで担っており、過労死ラインまで長時間労働を強いられているケースも珍しくない。また、先生が子育て世代になっても、自分の子どものケアをする時間もない」と話す。

少子高齢化やそれに伴う生産年齢人口の減少が日本社会の持続可能性を危うくする中で、日本企業や団体の働き方改革の必要性が叫ばれている。仕事一筋の人生に価値観を見いださない若者たちが増える中で、小・中学校が魅力ある職場として映らなくなっている。

「教育への熱意はあっても、先生たちが疲れ切り、笑顔が消えてしまったら、未来を担う子どもたちの学びはどうなるのか」。学校現場の働き方の現状を知れば、保護者は不安にならずにはいられない。

教育現場の働き方改革は教員の努力だけでは解決することが難しい。辻助教は関係者同士が話し合いの場を持つことの重要性を訴える。「学校、家庭、地域社会が一つの船に乗り、子どもたちの教育の向上のために一緒に漕ぎ出さなければいけない」

4・5面に関連記事

A日程入学試験

3日間で1万3千人が受験

国学院大学の一般選抜入学試験であるA日程入学試験が2月2日から4日までの3日間で実施された。受験生は約1万3000人で、昨年度から約7000人増加した。

試験は本学の渋谷・たまプラーザ両キャンパスに加え、8都市（札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡）と青山学院大学青山キャンパスにも会場を設け実施した。各会場では、新型コロナウイルス感染症予防として、マスクの着用や手指消毒など呼びかけたほか、教室も休憩時間に定期的な換気を行うなどの対策がとられた。

渋谷キャンパス会場では、到着した受験生たちが試験会場入り口の掲示板で自身の受験教室を確認すると、緊張した面持ちでそれぞれの教室に進んでいった。また、付き添いで訪れた保護者らがエールを送る様子や、見送った後に神殿を参拝し、合格を祈願する姿も見受けられた。

試験は大きなトラブルもなく終了し、15日には合格発表が行われた。本学の後期一般選抜入学試験であるB日程は、3月2日に渋谷・たまプラーザ両キャンパスで実施される。

みはるかすもの

ロシアによるウクライナへの侵攻開始から2月24日で1年になる。この紛争は、私たちにも決して無関係な話ではないのはご存知の通りだ▼インターネットやSNSも戦場の一つとして「情報戦」が繰り広げられ、AI技術による偽動画や写真などの巧妙な偽造手段も投入されている。自国に有利な国内外の世論や支持を獲得するためだ▼侵攻開始以来、発信された情報の真偽を検証するNGOの活動が注目されている。一方で、「フェイク」と断定した検証結果“こそがフェイクだ”として否定するサイトや、そのサイトの反論根拠をさらに検証するサイトなど、情報の真偽を巡る動

きは留まるところを知らない▼この情報戦に関連すると思われる投稿は、日本語でも行われている。虚偽報道やデマは、戦争や大規模災害、コロナ禍などの非常時に限らず日常でも発生している。重要なのは、情報を安易に鵜呑みにせず、慎重に判断することだろう▼検索サイトやSNSなどは、利用者の検索・閲覧履歴などから、個人の志向に最適化した情報を表示する。結果、まるで「泡」に包まれたように「好みの情報」で他の情報が遮断されるバブルフィルターという状態や極端な思考の先鋭化が問題になっている▼ツールが発達し、情報が氾濫するからこそ、たまには紙の新聞を読んでもみる、他者と意見を交換する機会を大切にするなど、他人の捉え方にふれる機会を大事にしたい。

経済学会懸賞論文 4名が受賞

見事に受賞した学生と星野学部長(左から2人目)ら



国学院大学経済学会が主催する「経済学会懸賞論文」の受賞者が決定した。この懸賞論文は、経済・経営・会計などに関するテーマの下、経済学部生が執筆した論文が対象。今年度は12件の応募があり、経済学部教員による厳正な審査により、優秀賞2本、佳作2本が選ばれた。表彰式は1月26日に渋谷キャンパスで行われた。星野広和経済学部長(教授)が「これまで

の研究で本質を追究する力や常識を疑う力を身に付けてきたと思う。社会に出てからも生きる力になっていくので、今回の受賞の成果を今後も発揮してもらえたら嬉しい」とエールを送り、受賞者に表彰状と院友経済会からの副賞を手渡した。受賞した学生と論文テーマは次のとおり(敬称略)。

優秀賞▽安積真帆(経4)「ラテンアメリカ経済と中所得国の

畏」▽東アジアの奇跡」から学ぶ経済発展

」▽牛尾陽(経ネ4)「直島における地

域活性化の課題と改善策の提案」アートを通

じた地域づくり活動の効果とその限界に注目

して」

佳作▽高橋滉大(経4)「コンパクトシ

ティ政策と自動車CO₂排出量の関係」全国市

区町村データと富山県

データを対象とした実

証分析」▽手柴奈緒(経4)「社会の変化

に伴って変わったジャ

ニーズの変遷」

人間開発学部学部長賞 13名を表彰

人間開発学部が毎年、教育実践や地域貢献、課外活動などで優れた活動に取り組んだ学生を表彰する「人間開発学部学部長賞」の表彰式が1月18日、たまプラーザキャンパスで行われ、13人が表彰された。

当日は、成田

信子・人間開発

学部長(教授)写

真前列左から3人

目)から受賞者に

表彰状と副賞、記

念品が手渡され、

様子を見守った同

学部の教員から温

かい拍手が送られ

た。19日には受賞

した学生と同学部

教員、職員が参

加し、「人間開発学部学生懇談

会」がオンラインで行われた。

学生たちは、それぞれの活動の

概要や得た学びなどを発表し、



それぞれの活動への取り組みが評価された受賞学生ら

次のとおり(敬称略)。

◆初等教育学科▽4年▽駒宮拓

海▽中津原壮大▽3年▽井上鍊

太郎▽武田妃女歌▽森本彩加

◆健康体育学科▽3年▽小金井

麻名▽佐藤沙也香▽島田雅人▽

谷本真

交換留学生ら4名が修了 別れ惜しみ国際交流送別会



送別会に集った留学生、学生・教職員ら

1月26日に渋谷キャンパスで国際交流送別会を兼ねたInternational Coffee Hourが開催された。今回は大学院交換留学生とK-STEP科目等履修生の計4名の留学期間終了にあたって、学生や教職員らが帰国する留学生を送別した。

岩瀬由佳国際交流推進部長(文学部教授)が「もうすぐお別れかと思うと寂しいが、今日は楽しんでほしい」と開会のあいさつをした後、留学生たちに修了証を手渡した。

留学生たちからは「さまざまな人と出会って楽しいことも難しいこともあったが、そのおかげでお互いに深く理解することができた」「みんながフレンドリーに接してくれて、今ではここが故郷のように感じている」と友人たちと過ごした日々を振り返りながらあいさつをし、学生たちからは大きな拍手が送られた。

参加した学生たちは、国際交流課の職員による進行でジェスチャーゲームやクイズを行いながら交流を楽しんでいた。本学の代表として2人の学生が留学生の母国語と日本語でメッセージを送り、別れを惜しんだ。

インフォダイジェスト

…在学生 …保護者 …卒業生 …一般 …受験生
内容 日にち 時間 場所 対象 申し込み 料金 問い合わせ

大学からのお知らせ

令和4年度卒業式・卒業証書・学位記並びに修了証書授与について

回 令和5年3月19日(日)

[卒業式]

場 グランドプリンスホテル新高輪 宴会場「飛天」

対・時

▶法学部・人間開発学部=10時~

▶経済学部=12時30分~

▶文学部・神道文化学部、専攻科・別科=14時30分~

[卒業証書・学位記、修了証書などの授与]

対・時・場

▶法学部=12時30分~、渋谷キャンパス

▶人間開発学部=13時~、たまプラーザキャンパス

▶経済学部=14時45分~、渋谷キャンパス

▶文学部・神道文化学部、専攻科・別科=16時45分~、渋谷キャンパス

※新型コロナウイルス感染対策のため、参列は学生の

みとなります

問 総務課(☎03・5466・0111)

国学院大学生協への出資金返還

生協加入時にお預かりした出資金の返還手続きを開始します。令和4年度の手続き詳細は生協HP(<https://www.kgucoop.or.jp/henkan2.html>)をご覧ください。

回 3月6日(月)~

対 令和4年度卒業生

問 生協事務所(☎03・5466・0165)

資金収支補正予算書 令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

収入の部				支出の部			
科目	補正予算	予算	増減	科目	補正予算	予算	増減
学生生徒等納付金収入	14,214	13,891	323	人件費支出	10,455	10,250	205
手数料収入	697	733	△ 36	教育研究経費支出	4,539	4,257	282
寄付金収入	287	293	△ 6	管理経費支出	1,362	1,292	70
補助金収入	2,828	2,627	201	借入金等利息支出	9	7	2
資産売却収入	0	0	0	借入金等返済支出	1,245	645	600
付随事業・収益事業収入	170	106	64	施設関係支出	237	191	46
受取利息・配当金収入	180	172	8	設備関係支出	342	397	△ 55
雑収入	535	478	57	資産運用支出	2,657	2,806	△ 149
借入金等収入	501	501	0	その他の支出	412	421	△ 9
前受金収入	2,913	2,702	211	予備費	309	309	0
その他の収入	1,517	1,297	220	資金支出調整勘定	△ 325	△ 318	△ 7
資金収入調整勘定	△ 3,356	△ 2,904	△ 452	当年度支出合計	21,242	20,257	985
当年度収入合計	20,486	19,896	590	翌年度繰越支払資金	8,849	7,708	1,141
前年度繰越支払資金	9,605	8,069	1,536	支出の部合計	30,091	27,965	2,126
収入の部合計	30,091	27,965	2,126				

事業活動収支補正予算書 令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

		科目	補正予算	予算	増減			科目	補正予算	予算	増減
教育活動収支	事業活動収入の部	学生生徒等納付金	14,214	13,891	323	特別収支	事業活動収入の部	資産売却差額	0	0	0
		手数料	697	733	△ 36			雑収入	0	0	0
		寄付金	283	261	22			その他の特別収入	31	55	△ 24
		経常費等補助金	2,810	2,612	198			特別収入計	31	55	△ 24
		付随事業収入	169	106	63		事業活動支出の部	資産処分差額	3	0	3
		雑収入	535	478	57			その他の特別支出	0	0	0
		教育活動収入計	18,708	18,081	627			特別支出計	3	0	3
	事業活動支出の部	人件費	10,473	10,297	176	特別収支差額		28	55	△ 27	
		教育研究経費	6,495	6,228	267	[予備費]		309	309	0	
		管理経費	1,482	1,412	70	基本金組入前当年度収支差額		148	55	93	
		教育活動支出計	18,450	17,937	513	基本金組入額合計		*△ 1,525	△ 1,431	△ 94	
教育活動収支差額		258	144	114	当年度収支差額		△ 1,377	△ 1,376	△ 1		
教育活動外収支	事業活動収入の部	受取利息・配当金	180	172	8	前年度繰越収支差額		△ 9,356	△ 12,446		
		その他の教育活動外収入	0	0	0	基本金取崩額		2	0		
		教育活動外収入計	180	172	8	翌年度繰越収支差額		△ 10,731	△ 13,822		
	事業活動支出の部	借入金等利息	9	7	2	(参考)					
		その他の教育活動外支出	0	0	0	事業活動収入計		18,920	18,307	613	
		教育活動外支出計	9	7	2	事業活動支出計		18,772	18,252	520	
教育活動外収支差額		171	165	6	※■第1号基本金…12億2500万円 教育の質向上のために取得した固定資産の価格						
経常収支差額		429	309	120	■第2号基本金…3億円 教育の質向上のために将来取得する固定資産取得に充てるもの						

令和4年度補正予算成立

令和4年度学校法人国学院大学補正予算は、1月26日の理事会・評議員会で承認、成立した。

◇資金収支補正予算

資金収支予算は、会計年度中のすべての収入および支出の内容と支払資金の顚末を明らかにすることを目的としている。

令和4年度補正予算総額は300億9100万円で、当初予算額対比21億2600万円の増額となった。

収入面では学費等納付金収入の増収を見込むほか、支出面では大学部門で借入金を繰り上げ返済したことにより、借入金等返済支出が増額とな

る見込みである。

◇事業活動収支補正予算

事業活動収支予算は、①教育活動②教育活動以外の経常的な活動③①②以外の活動、以上3つの事業活動収支の内容を明らかにするとともに、当該会計年度において基本

金に組み入れる額を控除した、当該会計年度の諸活動に対応するすべての事業活動および事業活動支出の均衡の状態を明らかにすることを目的としている。

本補正予算においては、基本金組入前当年度収支差額は1億4800万円の収入超過、翌年度繰越収支差額は107億3100万円の支出超過となる見込みである。

詳細は、学校法人国学院大学ホームページに掲載している。

(財務部経理課)

学問ノ道 第50回

久我建通と源氏の紐帯 ― 後編



石清水八幡宮本殿

久我建通が皇典講究所黎明期の難局に立ち向かったことはよく知られているものの、江戸後期の朝廷社会を生きた公家としての彼の一面には、あまり注意が向けられていない。例えば、伊勢神宮をはじめとした主要神社の祭使としての発遣や祭儀への参仕、また上卿としての関与などがあるが、なかでも石清水八幡宮関係のそれは興味深い。

いま『公卿補任』や『孝明天皇紀』などから確認される建通の勤仕には、

▼臨時祭の参仕(天保6年、天保10年、弘化2(1845)年)

▼放生会の上卿(天保6年、嘉永4(1851)年、安政2年)

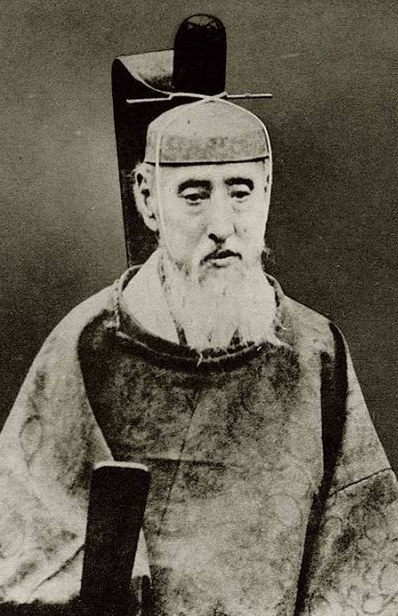
▼大嘗祭由奉幣の奉幣使(嘉永元(1848)年)

▼正遷宮日時定上卿(安政6年)

などがある。

ところで、石清水八幡宮あるいは八幡神というと、源頼朝を輩出した清和源氏との繋がりイメージが強いのではないかと、ややもすれば武神への連想も相俟って、八幡神はいわゆる武家源氏だけに縁あるものと考えられがちである。

しかし、本来、八幡宮という神社は、源頼信・義家父子が関係する以前から、すでに源氏全体(公家源氏諸流)に共通の氏神として崇敬を集めていた。清和源氏の専売特許であるかのような印象は、後世、清和源氏が勢を得るにおよび、清和源氏が勢を得るに至ったものである。事実、平安中期の源高明の故実書『西宮記』や同じく平安後期随一の学者で大江匡房による『江家次第』では、神社奉幣について「(石清水への奉幣使は)源氏中の四位の者」が勤める



久我建通

べき旨を明記する。他氏出身の人物が起用されるのは、四位の源氏のすべてに起用し得ない事情があるときに限られていたものであり、石清水八幡宮への使は「源氏」であることが常識だったといつてよい。

閑話休題。既述(令和5年1月号参照)のとおり、建通のもともとの出自は一条家、すなわち藤原氏の出身である。石清水八幡宮の年中諸祭儀のなかでも格別に重視される臨時祭や放生会への参仕や、とくに嘉永元年の大嘗祭で由奉幣の奉幣使となったことは、村上源氏嫡流・久我家の人間として建通の面目躍如であつたに違いない。

すると、石清水八幡宮への奉幣使発遣が源氏の人びとからとりわけ重くみられていたこと、同宮が彼らの精神的紐帯の場であつたことを念頭におくならば、久我家への養子入りの時期は未詳といったけれど同宮への建通の参仕や発遣の始期、つまり天保6(1835)年(21歳)ごろこそが、その時期であると考えられないだろうか。

研究開発推進機構 助教(特別専任) 比企貴之

データが表す学校現場の実態

経済学部経営学科の辻和洋助教らが著書『データから考える教師の働き方入門』（毎日新聞出版、平成31年）で取り上げたのは、過労死ラインを超えてまで働く小・中学校の教員たちの職場の実態だ。子どもたちの教育の向上がまず必要とされる中で、教育現場の主役となるべき教員たちの働き方改革の重要性が高まっている。

横浜市との共同研究で平成29年に実施した「教員の『働き方』や『意識』に関する質問紙調査」によると、教員の労働時間が、直近3日間の平均で1日当たり11時間42分だった。また、1日当たりの労働時間が12時間以上の教員は、全体の42・0％だった。育児・介護については、教員の中で約2割（22・3％）が未就学児の子育てをしていて、約1割（9・8％）の教員が介護をしていることが分かった。

仕事をを行う上で**ストレスを感じている教員の割合は78・7％**と約8割に上る。また、健康に不安のある教員の割合は51・1％と半数を超えている。こうした結果と長時間労働との関係を見ていくと、長時間労働をしている教員は、



やりがいを感じている
78.2%



時間外業務を減らしたい
82.9%



健康に不安がある
51.1%



ストレスを感じている
78.7%

働き方改革で熱意と教育の質の持続を

教員の働き方改革をどう進めたいのか。辻助教に聞いた。

「長時間労働になっ

てしま

う原因は何か

「小・中学校の先生たちの仕事は何ですか？」と尋ねると、多くの人から「児童・生徒たちに授業をすること」という回答が返ってくるが、実はそれは先生の業務のごく一部に過ぎない。先生たちは学校の通学路の点検や地域行事のあいさつ回り、夏祭りの見回りなどの福祉業務といわれる領域まで担っている。中学校の場合は、部活動にまで幅が広がる。諸外国には、ここまで広い業務範囲を先生に負わせている国は見当たらない。日本の先生たちは、教材研究など自分のために使う時間はほとんどなく、ランチもゆっくり食べられない。放課後までの授業時間帯でいえば、児童の安全管理が求められる小学校の先生はかなり深刻だ。児童から目を離せない

ので、トイレに行く時間すらなく、膀胱炎や腎機能の障害を伴う病気になる先生も少なくないという。日本では、地域住民や保護者からの先生に対する期待が大きいと

いう現状がある。「通学路で生徒がたむろしている」「ハチの巣が落ちているから除去してほしい」など、さまざまな困りごとをとりあえず学校に電話するようなケースもあると聞く。その結果、先生たちは授業準備や教材研究の時間が十分に取れなくなり、児童・生徒たちの学びの質が落ちていくという状況に陥っている。

「働き方改革について、民間企業との考え方の違いは

教育界でも働き方改革を進めようとしている。産業界ではコストを強く意識するが、教育界ではコスト意識がほとんどない。民間企業には所定の労働時間があり、それを超える時間は残業であり、残業代が上乗せされる。経営側は、残業が増えれば、コスト増の要因になることを認識している。管理職は、部下たちの残業時間を把握し、残業が多いと人件費が上昇するという意識を持つことが求められる。これに対し、学校ではこうした意識が乏しく働き放題になっている。背景には、

「給特法（公立学校の教員を対象に、労働基準法とは異なる時間外勤務に関する特殊ルールを定めた法律）」の存在がある指摘されている。もう一つは、先生たちの使命感だ。子どもの未来・将来を担っているという職業倫理があり、自分の心身の健康のために、効率的に働くという意識が生まれにくい。使命感が強いほど、惜しみなく子どもたちに手をかけたという気持ちが強くなる。教育にかける時間が長いほど、質も高まっていくという比例関係が成り立つかと思ひ込み、犠牲心が働きやすい。

「教員の働き方改革はなぜ、喫緊の課題なのか」長時間労働によって、先生たちの心身の健康が失われれば、子どもたちに良い教育ができなくなる恐れもある。先生たちが使命感をもって、一生懸命教育に取り組むことは大切なことだが、それは持続可能な範囲でなければならぬ。長時間労働で先生が体を壊したり、メンタルを壊したりしたら、子どもたちに良い

組みやすい。学校の先生は、それぞれのクラスを持っていて、どうしても一國一城主としての働き方になり、教材や情報を共有しないケースが多い。子どもたちの学びの質が落ちないと思えるところは、先生同士での情報共有を積極的にに行いながら、効率化を進めていくことが大事だ。また、細かい部分になるが、机の上を整理整頓することやデジタル化を進めることなど、作業しやすい仕掛けを作っていくと、生産性が高まる。例えばこれまで10分かかった作業が9分になる。細かい作業の効率化による1分短縮の積み重ねが、意外と大きな時間になる。

この3つの方法のほかに、例えるなら漢方薬による体質改善のように、職場の雰囲気を変えていくことも重要だ。まずは、教職員が働き方について職場で対話してみることが良い。民間企業がプロジェクトに取り組み際のチームマネジメントの考え方と同じだ。多くの組織では、成果が、チームの振り返りを持つが、チームの状況はどうなのかを話す機会はある。教職員の職場の状況はどうなっているのか、若手の先生だけに業務が偏っていないか、ベテランの先生だけが意見を述べていないか、校長先生のトップダウンだけで物事が決まっていけないかなど、メンバーの問題意識や意思決定のプロセスについて忌憚のない意見を交換する。客観的なデータをいながら話す対話が深まる。職場の状況に意識を向けていくことで、結束力の強い職場のチームを作り上げることができる。例えば、他の先生に頼み事をしやすくなった、子育て世代の先生たちは自分の子どもをお迎えなどのために早く帰りやすくなった、教員にストレスがかかる。定時退勤日を決めても、業務量が減らないのであれば、結局は仕事の持ち回りが多くなる。時間を制限するのなら、業務も精選しなければならぬ。「カット」と「キャップ」の組み合わせを考えながら改善していくことが大事だ。

「その他にはどのような方法があるのか」3つ目の方法としては「効率化」があり、「カット」や「キャップ」と比べると取り組むべきものという意識を持つてベストな状態を作り上げることが大事だ。互いの立場や主張だけがぶつかり合うことがないように、客観的なデータを見ながら、子どもたちの教育にとっての最適解と一緒に導き出していくような場にするという。

「学校の先生になろうと考えている大学生にメッセージを」子どもたちに対する教育に、やりがいを持っている先生は多い。子どもたちの成長の瞬間に立ち会えることができ、教師、実利に尽きる。しかし、今、教師はやりがいの追求に価値を置き過ぎて、自分の健康や私生活がおろそかになっている。働き方

を見直すべき転換点にある中で、これから教師になる世代は、一つの組織における仕事に従事するだけではなく、地域活動、ボランティア、プライベートなどのワークライフバランスにも意識を向けて、新しい時代の教師像を作り上げていくべきだ。決して、これまでの教師の働き方を否定するのではなく、アップグレードするということだ。自分の生活を犠牲にし、高度成長期の日本の教育を支えてこられたベテランの先生たちに対するリスペクトを忘れずに、世代を超えて、互いの意見に耳を傾け、一緒に新しい働き方を模索し、教育界を盛り上げる主役になってもらいたい。

重要なのは学校・家庭・地域の三位一体

「教員の意識を変えるほかに、何が必要か

子どもの教育は、学校だけでなく、地域が同じ船に乗り、子どもを支えていくという意識を共有しなければならぬ。保護者は生活を安定させるために、働くことに懸命になっている状況は理解できる。しかし、子どもの教育に関心を向けず、学校に全て任せてしまっ

ては、先生たちの働き方は改善せず、結果として子どもたちへ良い教育を提供できなくなることに繋がる。先生も忙しいし、保護者も忙しい。その中で、お互いがどう歩み寄れるのか。対話の場を持つことがその第一歩となる。互いの状況を理解し、学校、家庭、地域が三位一体となっ

教師の働き方改革

学校 家庭 地域の協力が鍵

つじ・かずひろ

国学院大学経済学部経営学科助教。博士（経営学）。専門は人的資源開発、組織開発、ジャーナリズム。読売新聞大阪社会部記者、産業能率大学総合研究所勤務などを経て現職。



陸上競技部

1年生トリオが好記録 丸亀国際ハーフマラソン

第75回香川丸亀国際ハーフマラソン大会が2月5日、香川県立丸亀競技場を発着するコースで開催され、国学院大学陸上競技部から4選手が出場し、積極的な走りを見せた。

この大会は、平坦なコースを走ることから好記録が生まれやすく、国内外の実力者が揃うことで知られている。

レースは序盤から実業団選手や海外選手を中心に高速ペースで進んだ。4選手はレースの流れに乗り、10km通過はそれぞれの1万m自己記録を上回るタイムという積極的な走り。後半も各選手が粘りを見せ、高山豪起選手（法1＝写真左）が自己ベストを更新する1時間1分

42秒の本学歴代3位の記録となり、15位でゴールした。青木瑠郁選手（健体1＝同右）は初のハーフマラソンながら1時間2分2秒（同歴代5位）の23位で続いた。青木選手はジュニア日本歴代でも5位となる好記録だった。嘉数純平選手（健体1）も初挑戦ながら、1時間2分18秒（同歴代8位）となり、1年生トリオの活躍が光ったほか、木村文哉選手（経営2）も1時間3分48秒と粘りを見せた。

優勝は世界歴代4位の記録をもつアレクサンダー・ムティソ選手（NDソフト）で59分17秒の日本国内最高記録だった。



写真は1月の箱根駅伝時 ©月刊陸上競技

7面から 第18回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

地域民話研究部門（個人）最優秀賞

宮城県昔話事典 動物昔話篇

登り美美さん（宮城・仙台育英学園高2年）

宮城県の「動物昔話」を分析し、描かれる動物の種類とその分布、モチーフの分類から地域の特色を明らかにすることに目標を置いた。『日本昔話通観』第4巻宮城（同朋舎1982年）収録の「動物昔話」を分析対象とし、特徴的な昔話が数多く残る地域を見つけ、現地調査と文献調査を行うという手順で分析を進めた。

その結果、宮城県の「動物昔話」に登場する動物は蛇、猿、蛙、狐、雀の順に多く、

博物館において、江戸時代における地域の特色について知ることができた。江戸時代の両地域は仙台藩の重要な穀倉地帯で、旧登米郡は迫川や北上川を使った物流の中継地点としても栄えた。伊豆沼をはじめ多くの沼があったが、18世紀以降の新田開発で農地に変わり、石高を大きく伸ばしたという。この史実と「動物昔話」の地域的な特色には関わりがあるのではないかと考えて、次のような仮説を立てた。

古代神話で蛇は「神聖な動物」として描かれることが多いが、この地域の昔話に登場する蛇は「忌まわしい動物」と対照的だ。「蛇＝神聖な動物」という意識が地域の人々

地域民話研究部門（団体）最優秀賞

伊予国小野谷に残る小野小町伝承の謎を解く・2

愛媛・松山北高 郷土研究部

昨年度も松山市を流れる小野川上流の小野谷に残される小野小町伝承について研究（※）したが、全国の小町伝承地が地形と関係あるのか、なぜ小野谷に小町伝承が伝わっているのかについてさらに研究する必要があると感じ、今年度も同じ題材で研究を継続した。

まず、小町伝承が伝わる伝承地の地形について調査した。小町伝承は寺社に伝わっていることが多いので、山間部に伝承地が集中していると考えていたのだが、結果として伝承が山間部以外の市街地・海浜部・島嶼部等にも多く残されており、小町伝承と地形の関連性は認められない

伝承にちなみ、総大将であった小野好古の叔母に当たるとされる小野小町の伝承を梅元寺に持ち込み、薬師如来の霊験談を説いて、梅元寺を庇護していったものと考えられる。結論として「なぜ小野谷に小町伝承が伝わっているのか」という謎は、「小野谷が森貞氏を通じ小野好古に関連する土地であるから」ということだ。

これまで、私たちは地域の方々の協力を得ながら、小野

谷の小野小町伝承の成立の謎について解明してきた。この伝承を地域の宝として多くの人々に広めるために今年度は劇を作り、地元の小野公民館、梅元寺、小野小学校に向いて上演もした。

今後の課題として、梅元寺周辺の他の伝承についても調査してみたいと考える。これからも、私たちが調査・研究した伝承を、小中高生や地元の人に分かりやすく面白く伝えていこうと思う。

高校生向けコンテスト

「入賞作品集」を刊行

今回のコンテスト入賞作品を掲載した「全国高校生創作コンテスト入賞作品集」と『「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集」を制作、いずれも2月下旬に刊行します。両作品集とも国学院大学広報課の窓口で先着順に無料配布いたします。発送をご希望の方も受け付けますので、希望部数と送付先をご連絡ください。

創作コンテストの短篇小说部門は佳作までの作品を、現代詩・短歌・俳句の3部門は入選までの全作品を収録しています。なお、今号掲載の「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストのリポートは作品集に掲載する文章を再編集したものです。詳しくは作品集をご覧ください。

問

総合企画部広報課（☎03・5466・0130）